

教化センターだより

No398

発行日 2020年 8月1日
発行 真宗大谷派大阪教区
教化センター
TEL 06-6251-0745
FAX 06-4708-3278

◆ 御堂文庫 蔵書の紹介 ◆



『中村薫講話集全5巻』

中村薫師の講演録、法蔵館より発刊。
1998年1月30日第1刷発行。

- | | |
|---------------------------------------|---------------------------------------|
| ①「いのちを差別するもの」
—人間解放への道
—青少年といじめ | ④「いのちの確かめ」
—いのちの確かめ
—女人往生 |
| ②「自然のいのち」
—自然のことわり
—いのちは誰のものか | ⑤「響き合ういのち」
—金子みすゞとお念仏
—宮沢賢治とお念仏 |
| ③「いのちの宗教」
—真実の宗教
—蓮如上人と現代 | |

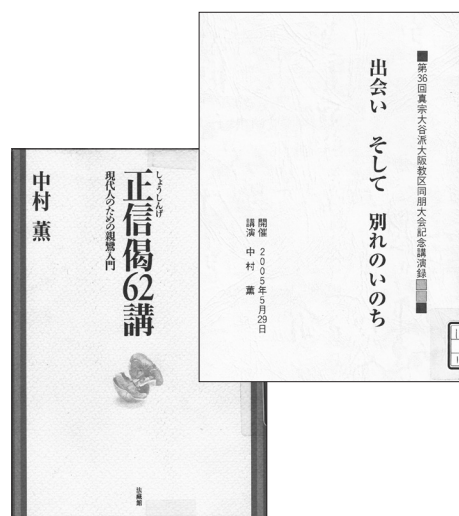
第回36 真宗大谷派大阪教区同朋大会記念講演録

『出会いそして別れのいのち』

本書は2005年5月29日に第36回真宗大谷派大阪教区同朋大会において、中村薫氏（同朋大学教授）が「出会いそして別れのいのち」という講題でお話しされたものを加筆訂正いただいたもの。（あとがきより）

『正信偈62講』 —現代人のための親鸞入門

本書は、もともと真宗大谷派高山教区の「ひだご坊」という新聞に、毎月1回5年間ほどかけて掲載したものです。編集子の方からの要望は、『正信偈』を現代に問う意味で、社会問題を含めて先生の自由な発想を含めて書いてほしいということでした。（あとがきより）



事務休日のお知らせ

今月11日(火)から14日(金)まで、夏季事務休日とさせていただきます。事務開始は、17日(月)からとなります。

— 8月のリーフレット —

リーフレット①

「掲示板のごとは」……藤沢政至
「回心ということ」
ただひとたびあるべし」

リーフレット②

「今月のごとは」……廣瀬 俊

『三蔵流支授浄教
焚焼仙経帰樂邦』

リーフレット③

「もしもし相談」……安城正人

『法名軸と過去帳
どちらが正式?』

リーフレット④

「仏典マンガ・仏さまのおしえ」
『楽師グッティラ』

(敬称略)

回心と修行のこと

ただひとたび

あるべし

『歎異抄』

これは『歎異抄第16章』の「一向専修のひとにおいて、回心と修行のことただひとたびあるべし」という言葉です。回心とは、「自己の不信の心に気づき、宗教の世界に向かつて目が開かれること」であり、特に浄土教では、「自力の心をひるがえして、本願他方に帰すること」をいいます。つまり、自力の心では阿弥陀仏を信じられない、という気づきによってひるがえり、阿弥陀仏の摂取不捨の本願他力の世界に向かつて目が開かれてゆく、ということかと思えます。

次のような心理学者の言葉があります。「究極的な自己受容とは、生きていくだけで、存在しているだけで価値がある。ということであり、自己評価よりももっと深いものです。それは、理性を超え、道徳を超えた自己肯定感なのです。（ナサニエル・ブラン

デン）ここに、阿弥陀仏の摂取不捨の心の表現を感じます。しかし、著書の中ではこの一文以外、徹底して自己評価を高める方法と訓練を奨めています。私はそちらの方に心惹かれ、その自力の行によって善い人間となり、助かりたいと思っています。

そんな私は、阿弥陀仏の摂取不捨の誓願を前にして領けずにあります。そのことを同章の中では、「やはり善人だけを救うのだらうと思うから、他力におまかせする心が欠ける」と示されています。これこそが領けない私の心の正体、自力の執心なのでしよう。

改めて考えてみますと、本願を信じて一筋に念仏する人にとつての回心とは、そのたびそのたび、悔い改めて善人になろうとして生きる、そういう私たちの自力の執心がひるがえることなのでしょう。

（藤沢政至）

三蔵流支授浄教
 焚烧仙経帰楽邦

三蔵流支、浄教を授けしかば、
 仙経を焚烧して楽邦に
 帰したまいき。

30年以上前だろつか、
 自坊の報恩講に松井恵光
 先生がご法話に来られて
 いた。どんなお話だった
 かは覚えていないのだ
 が、法話の中で「うちの家
 内がなあ、お寺の近くで
 カラスが鳴くとなあ、『お
 父さんカラス鳴いてる
 わあ、またお葬式やで』っ
 て、こんなこと言いより
 まんねんでえ」と、柔ら
 かな河内弁で語り、参詣
 者をドツと沸かせた。そ
 してこう言葉を続けられ
 た「自分が死ぬとも知ら

んとなあ」また
 ドツと沸く。しか
 しその後ドキッと
 する。そうなので
 す、カラスが鳴い
 て誰か死ぬとい
 うのもおかしな話で
 すが、そんな時に
 死ぬのはいつも自分以
 外の人だと思っているのが
 私たちの常なのです。
 親鸞聖人がご和讃で
 「外儀は仏教のすがたに
 て内心外道を帰敬せり」と
 言われていますが、そ
 の外道の特徴は吉凶禍福
 に迷うことです。いつの
 時代においても、息災延
 命を願わない人はありま
 せんが、災いが止み、寿
 命が延びることが吉であ
 り。その反対に災いが続
 き、寿命が終わってゆく
 ことが凶なのです。だか

ら外道が最終的に求める
 ものは不老長寿なので
 す。そしてその不老長寿
 こそが曇鸞大師が握り締
 めた仙経の中身です。そ
 れは現代の私たちにも
 「死んだら終わり」「生き
 ている内が花」と、長生
 きを願うこととして続け
 ています。「人生100
 年時代に向けて」と厚
 労省も唱っています。が、
 日本には100歳以上
 の人が既に6万人以上。
 2050年には100万
 人を突破する見込みだそ
 うです。不老不死などあ
 り得ないのは百も承知の
 はずですが、何か「死な
 ない生き方」を模索して
 いる私たちの姿がそこに
 あります。

かつて信国淳先生は
 「汝、無量寿に帰れ。無
 量寿に帰って、無量寿を
 生きよ」と呼びかけられ
 ました。それは菩提流支
 が、仙経を握り締めてい
 のちを私有化している曇
 鸞大師に、「百年生きて
 も、必ず死ぬいのちでは
 ないか。その迷いを超え
 る道がここにある」と無
 量寿の教えを示されたこ
 ととよく似ています。浄
 土の教えを授かったとい
 うことは、なにか新しい
 ものを受け取ったという
 ことではなく。それまで
 握り締めていた息災延命
 の願いを棄てて、本来の
 いのちへ帰って行くとい
 うことなのでしょう。

(廣瀬 俊)

今月のことば出典『正信偈』

『真宗聖典』

206頁

『真宗大谷派 勤行集』(赤本)

もしもし相談



法名軸と過去帳
どちらが正式？

問

先日ご住職さんに、父の位牌を作る相談をしたら、法名は「お軸」にして仏壇の側面に掛けるように言われました。友人は「過去帳」に記入するようにと、手次の住職さんに言われたそうです。できるだけ正式にしてあげたいのですが、どうしたらよいでしょうか。

(48歳・男性)

答

一般的に仏教徒は、仏壇の正面に本尊を掛け、位牌を安置し、先祖供養をしています。真宗門徒は、お内仏の中心に本尊(阿彌陀如来)を掛け、法名記

(過去帳)を置くか、法名軸をお掛けしてお勤めします。

法名記・法名軸には戒名ではなく、法名を記入します。一般的には「どちらでも同じだ」と思われています。しかし、戒名は出家し、戒律を守り、厳しい修行をされた方に与えられる名です。法名は、出家や修行をしなくても、誰でもいただけます。法名は始めに「釋」という字がついています。これは、仏弟子であることを意味します。大切な人生において念仏の教えを依り処として生きていく証でもあります。

四十八歳の貴方が法名のことに関心を懷かれたのは、ひょっとしたら亡く

なられたお父様のご催促かもしれないよ。法名のことを通して貴方に「お前も浄土真宗の教えを聴聞し、大切な人生を歩んで欲しい」と願っておられるのだと思います。

筆者は今年の八月で七十四歳になった老人です。娘三人と五人の孫を頂きました。彼等にも親鸞聖人の南無阿彌陀仏の教えに出遇って欲しいと思っています。貴方のお父様も、私の亡くなった父母も共に諸仏となつて、南無阿彌陀仏を讃嘆し、念仏を称えることを勧めてくださっているのですよ。

貴方の質問に対する答えは、「法名記(過去帳)でも法名軸でもどちららで

も正式です」ということです。そして、御命日に法名軸を掛けるか、法名記を開くかして、南無阿彌陀仏と念仏する生活を始められることをお勧めします。儀式や莊嚴は心の表現であり、真実に気付くための方便なのです。真実に出遇つには、縁・時機が熟さなければ自分のちからではどうにもなりません。今回の貴方の問いは、縁と時が熟したといえるでしょう。しかし、まだ機が熟したとはいえません。機とは人間のことであり、自分自身のことです。貴方が「心の奥深くに求めていること」に気付かれることを機が熟すといつのです。

(安城 正人)



仏典マンガ・仏さまのおしえ



絵：小川ゆきえ〈182〉

③ ついには 国一番の楽師と なりました

② ①

がくし 楽師グッディラ

はじめた キッカケは？

⑦

グッディラは 母親のために 琵琶を弾かなく なりました

⑥ 僕の琵琶は 国一番だぜ！

ちゅっ 分かってないな！

⑤ 前のほうが 良かったよ

今の音色はまるで 自慢しているようだ

④ エヘン どうだい？ 母さん

⑩

母さん… 聞いてほしい

⑨ あなたに 喜んでほしいから 琵琶を始めたことを…

思い出したよ 母さん…

⑧ やがて母は 亡くなりー

お母さんが ほめてくれた から

⑫

その音色は 都中に 響き渡りました

⑪ 優しいの、 仏の教えの よう

慢心なき 音色は 澄み切って

参考・『ジャータカ物語』

『ジャータカ』は、仏陀の過去生の物語集。パーリ語聖典では、22編547話からなっています。多くの經典の中に引用されて、經典の広がりとともに、世界各地に伝えられました。(ジャータカ243)